—特集　追悼・三上一夫—

三上一夫先生遺稿

[二] 二・二六事件にかかわる危機的情勢についての一考察

一　課　題

昭和十一年（一九三六）の二・二六事件は、余りにもその影響力が大きかっただけに、その具体的動向を再検討する必要がある。

まず二・二六事件にかかわる危機的情勢に視点をすえねばならない。さらに埼玉県在住の増田初一氏の体験談に着目したい。

本事件を契機として、日中戦争をかもし出したことに改めて、検証のメスを加えることにする。

二　二・二六事件にかかわる危機的情勢

昭和十一年（一九三六）二月二十六日に起った皇道派青年将校によるクーデター。陸軍部内の皇道派青年将校は、北一輝の影響をうけ、武力による国内改革を企図、こうして統制・皇道両派の対立が激化し、第一師団の満州派遣が発表されて、蜂起を決意、二十六日早朝、村中孝次、磯部浅一、安藤輝三らは、歩兵第一・第三・近衛歩兵第三各連隊から一四〇〇余の部隊を出動させ、斎藤実内大臣・高橋是清大蔵大臣・渡辺錠太郎陸軍教育総監らを殺害、陸軍省・参謀本部・国会・首相官邸など一帯を占領、陸軍上層部に改造を要請した。

陸軍当局は、戒厳令を敷いたが、収拾策をもたず、海軍・政財界

がクーデターを支援しない気配をみて、弾圧に転じ、二十九日地方部隊の上京を待って、蜂起部隊を反乱軍と規定することになる。

三　埼玉県在住の増田初一氏の体験談

埼玉県羽生市在住の増田初一氏（平成二十五年二月二十日、九十八歳）は、第一師団所属の歩兵第三連隊の機関銃隊にいた。二十六日午前一時ごろ、上官から「暴動が起きた。鎮圧のため出動する」と起こされた。一月に入営したばかりの初年兵であったが、上官の命に従い、警視庁を占拠した。

軍人会館（現、九段会館。千代田区）に置かれた戒厳司令部は、ラジオ放送・アドバルーンなどで、反乱軍に帰順するよう説得したが、増田氏は、アドバルーンを見たことを、はっきり覚えている（「毎日新聞」平成二十五年二月二十日（水）朝刊に、増田氏の上半身の肖像が鮮明に掲載されている）。

結　語

この二・二六事件は、まさしく「身の毛がよだつような事件」で、本事件を契機とする日中戦争の発端となる盧溝橋事件―その後の日本の致命的な歴史を宿命づけることは周知のとおりである。

ところで、反乱将校は陸軍刑務所に収容され、非公開・弁護人なし・一審限りの軍法会議の結果、昭和十一年七月十二日と翌年八月十九日、現役の将校十三名を含む計十九名が銃殺刑に処せられた。

刑場は陸軍刑務所、現在の渋谷税務署の一角とされる。同署の隣接地に、青年将校の遺族団体（「仏心会」）が慰霊像を建立した。

道路を隔てて、ＮＨＫ放送センターがある。同局関係者によると、処刑場に近いスタジオには「軍靴の音」がするという言い伝えがある（「毎日新聞」平成二十五年二月二十日（水）朝刊）。

なおこの事件で、岡田内閣は倒れ、統制派に握られた軍部は政治的発言権をますます強めることになる。

（平成二十五年八月十二日受理）